「！ぁあ……っ♡♡う…っ♡、ぁあぁ…っっ♡♡」

そう思っていると、今度は強めの力で竿を上下に擦られはじめる。
もちろん孔の浅い場所での行き来は続けられたままだ。

「ひ♡♡、あ♡、ぁあぁあ……ッッ♡♡♡」

思わず股間を男に突き出すようにしながら、少年はのたうつ。

「……ひッ！？！♡♡♡♡、」

唐突な刺激を片方の胸に感じた。
見ると三男がベッドの端に座したまま、身をひねって少年の胸へ手をのばしている。長い指の先で、少年の尖りきった乳首をやんわり摘まんだかと思うと、面白がるように指の腹で転がしてくる。

「ぁあああぁ……ッッ♡♡♡♡♡、♡」

今までの主人に躰のいろいろな場所を責められてきたが、乳首は感じてしまう場所のひとつだった。
そこを性感の昂った状態で弄(いじ)られると、頭が真っ白になるほどの刺激が体内に

疾(はし)りぬけた。

「ぁあ…ッ♡♡ぁあぁ…っっ♡…♡♡、あ、♡」

片方の乳首をこねくり回され、身も世もなくもだえてしまう。気づけば腰がこれまでにないほどがくがくと揺れていた。あまりに淫らなその動きに、自分でも目を覆いたくなるほどだ。
一際激しく腰が揺れた拍子に、浅く挿入されていた男のものが抜け落ちてしまう。

「ごめん、つらいよね。一気に終わらせるから」

「…ッ！？！！、」

そう言うと目の前の男は、あくまでも生真面目そうに少年の腰骨をがっちりと掴んだ。
動きを封じられた腰が、男の手の下で小刻みに震えつづけている。
ぬちっ、と濡れた音がして、

「あぁあ″あ……ッッ♡♡♡♡♡」

一息に深く突き入れられた。

濡れに濡れた孔を唐突にこじ開けられ、今度こそイった――と思ったのだが、やはり射精には漕ぎつけない。

「もう少し浅い場所で慣らしてからのほうが、君がつらくないと思ったけど。なかなか射精(だ)せそうにないから……、ごめん」

この男の言う少年のつらさというのは、おそらく痛みや圧迫感による苦しみのことだろう。
まさか淫紋の催淫効果がここまで強いとは、気付いていないようだ。本当は浅い場所だけで抜き差しして少年のなかに射精(だ)すつもりだったのに、彼自身の持続力があるばっかりになかなか吐精感が込み上げず――といったところなのだろう。
そういった状況はなんとなく理解できるのだが――。

「ん″…っ♡♡♡あ…ッ♡♡ぁあ…ッ♡ぁあああぁ……っ♡っ！♡♡♡」

なかを大きく行き来されはじめ、少年はいよいよ追いつめられた。
奥まで突き入れられるたび、熟れきった肉洞がぐじゅぐじゅと音をたてる。
この長大なものをこのままなかで擦りたてて、一気に射精まで突き進むつもりなのだろう。
孔内の粘膜を掻き混ぜられるたび快感が幼茎に直結し、もう触(さわ)られてもいないそこが張り詰め続けている。

「あっ♡♡あ…ッ♡ぁあ……♡っひッッ♡♡♡」

三男が体勢を変えて覆い被さるように寄ってきたかと思うと、今度は両方の乳首を摘ままれた。

「い…ッ♡♡♡ぁあ…！♡♡」

片方だけでも耐えがたい刺激だったのに――両胸を同時にくりくりと弄(もてあそ)ばれ、体内に小さな稲妻が疾(はし)る。電流のような疼きが下腹部に落下し、抜き差しされている孔や竿を余計に苦しめた。両の胸と脚の間とを快感の糸で結ばれたようになって、悶えても悶えても淫猥な波が体内にあふれ続けている。しかし、硬くなりきっているはずの幼茎から精が噴き出すことは決してない。

「ぁあぁぁぁ…ッ♡♡♡ぃや…っいやあ……ッッ、♡♡♡♡」

燻(いぶ)されるような快感に耐えかね、両目からぼろぼろと涙をこぼしながら、首をうち振るう。

主人の前でこんなにはっきり否定の意をあらわにしたことはなかった。言うことを大人しく聞き、じっと耐え忍ぶことだけしてきた。けれど今は、そんな自制もきかぬほど躰も心も乱されきっている。

「もう…少し……、だから……、」

律動をやめず、男は言う。

長男よりやや筋肉量が少ないながらも、がっしりとした体躯。

知性的な印象の強い面立ちにうっすらと汗が浮かび、先程までの生真面目そうな表情とのギャップにどきりとさせられる。

思わず彼の顔に見入っていると、不意にかがんできた三男の頭部に視界を遮られた。

「ひあ″…ッッ♡♡♡！、」

片方の胸に強い痺れが疾(はし)る。見ると、三男が色づいた片側の乳首を軽く噛んでいた。

歯を当てられた場所から、ジンと痛みの一歩手前の痺れが伝わる。その感覚が引き去らぬうち、まるで慰めでもするようにやわらかな舌で乳首全体を包まれた。

「あぁ…♡♡、あああ……♡♡♡」

もう片方の乳首は指に捏ねられ続けている。

恥ずかしいほど硬くなりきった乳首を片方は指で押し倒され、もう片方を唾液のふんだんにまぶされた舌でぬるぬると舐められる。

「ん″…ッ♡♡あ″…ッ♡ぁあぁ…っ♡っひ♡♡♡、ひ……ぃ…ッッ♡♡♡♡、」

胸の頂を先を尖らせた舌で軽くつつかれたかと思うと、もう片方の乳首を思い切り指の腹で圧(お)し潰される。そのままの指圧でぐりぐりと容赦なく揉み込まれ、もう片方をちろちろと硬い舌先で嬲(なぶ)られる。
てんでばらばらな刺激に翻弄され、陸にあげられた魚のようにのたうつことしかできない。けれど押さえ込まれた腰はそれすらも許されなくて、がっちりと両サイドから固定されたその場所に、何度も何度も強制的に肉棒を打ち込まれる。

「あ″…ッ♡♡♡ぁあ…っ♡いやあ…ッッあ″ぁ……っ♡っ！♡♡♡♡イく…っ♡♡イく…う……！！♡！あぁ″あ……ッッッ♡♡♡、♡♡♡♡♡」

絶頂を迎える際、「イく」と言わなければ折檻をしてくる主人が過去にいた。混濁した少年の意識が、そのときの習わしを口にのぼらせる。

「……ん？イくの？……射精はできないけど？」

三男がふと顔をあげ、意地悪そうに笑う。
そうだった。
今、自分の躰は――

「あぁ″…♡ッ♡♡♡だ…め……っ、っあぁ…ッ♡♡♡あ″…ッ♡♡あ♡っっ♡♡♡ぁあ″…ッ♡ぁあ″ッ♡♡ッあっ♡あっ…っあっ♡♡あっ♡♡♡あ″ッ♡あ″ッ♡、♡♡♡♡」

ぐちゅ！ぐちゅ！！、と烈(はげ)しく突き上げられる。
律動の速度があがり、息を継ぐ間もない。

「あ″あ″……ッ♡ッ♡♡！♡♡♡♡ぁあぁ″あ！！！！♡♡♡♡♡♡♡」

最奥に一際つよく図太い肉杭を打ち込まれた。
臓腑が燃え上がるような快感に焼かれ、後頭部でばちばちと何かが弾け――なかった。
幼茎からも肝心なものが出ない。
絶頂の一歩手前の快感が、全身の神経を尋常でなくひりつかせるばかりだ。

「あぁ″…ッ♡♡♡い″…ッい″や″あ…っっ、ぁあ″ッッ♡♡♡も…イく…っ、っ、イ″くのお″……！！、♡♡♡♡」

あまりのもどかしさに泣き喚き、わきめもふらず駄々っ子のように訴えてしまう。
頭も躰も本当におかしくなってしまいそうだった。

「ごめん……、もう……、もう射精(だ)すから……、」

男のものはいまだ衰えていない。

むしろ滾りの増した剛直で最後の追い上げと言わんばかりに、これまで以上に腰を大きく挑ませてきた。

ぐちゅッ！ぬちゅっっ！ぐぢゅ……ッッ！！、という音だけが、少年の世界のすべてになる。

そして――

「ああ″ぁ″あああ……っっっっっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

ふたたび奥深くに打ち付けられるとともに、ふたたび行き止まりの快楽を味わわされ、もどかしさが限界点に達する。

もちろん射精はできない。

体内で燻されのたうち続けた熱が、はじけることなくぎりぎりまで膨れ上がったにすぎなかった。

今自分は、焦らされすぎたせいで酷い顔をしているに違いないと、少年はそう思う。涙と汗と口の端からつたう唾液とが、少年の火照った肌を濡らしている。

強く強く打ち込まれた孔奥で、勢いよく噴き出す精の奔流を受け止めた。

「……ぁ…♡、ぁ……♡は……、……♡、」

ずるり、と男のものが抜け去り、押さえつけられていた腰を解放される。肩で乱れた息を継ぎながらも、引き去らぬ熱に悩まされる。

どろ、と孔から白濁が零れ落ちる。そこははくはくと開閉し、また何かを埋(うず)めてほしがっている。もうなかに男は居ないのに、虚空をしめつけるように内壁がさざめいて仕方がない。きゅんきゅんと隧道をつぼめるたび切なさが増して、自由になった腰がまた淫らに動きはじめてしまう。

「……今度は、俺の番(ばん)」

ぼそりと呟いた三男が、次男と場所を入れ替わる。

正直、もう一刻も早く孔に挿入(いれ)られたくて堪らなかった。射精を封じられた躰に淫靡な熱が滞留して、臓器や思考をどろどろと熔かされていくような錯覚を覚える。はしたないとわかりつつ、壮絶なもの寂しさを覚える股間を、目の前の男――三男に向かって突き出すように揺らしてしまうのを止(と)められない。それがすごく恥ずかしくて、三人の美しい男たちの視線が注がれる躰が、ますます熱を帯びていく気がした。

「……雌イキ、できなかったね」

「……？、」

淫紋を撫ぜながら三男は言う。

ぴくりと下肢をわななかせつつ、先程も聞いたそれは一体なんなのだろうと少年は思う。

そんなことより、今はこの熱を鎮めてもらいたかった。内にこもる淫靡な苦しみから、一刻もはやく解放されたい。

「……雌イキ、できるようにしてあげよっか」

「……？、…っ、」

意味がわからず戸惑っていると、ふふ、とまた意味ありげに三男は笑い、少年の脚の間に腰を据えなおす。

「あのなぁ、遊びじゃないんだぞ」

「兄さんの言うとおりだ。こんな可愛い子をいじめたら承知しないからな」

両サイドから二人の兄がたしなめてくるも、三男はどこ吹く風だ。